

米地文夫先生を偲んで

総合政策学会理事長 吉野英岐

岩手県立大学名誉教授の米地文夫(よねちふみお)先生が、2019年4月13日に84歳でご逝去されました。米地先生は1934年に宮城県で生まれ、東北大学理学部地学科地理学専攻を卒業され、1979年に「最上川流域の地形構造に関する研究」により、理学博士(東北大学)を取得されています。山形大学、東北大学、岩手大学での勤務を経て、1998年4月の岩手県立大学の開学と同時に総合政策学部教授に就任し、2005年3月31日に退任されるまで、研究、教育活動の面で多大な功績を残されました。

特にも、総合政策学会が発行する『総合政策』においては、本学退任後も研究論文を寄稿され、歴代最多となる論文34編(共著論文を含む)と研究ノート1編をご執筆されました。このほかワーキングペーパーも4編作成され、本学会に大きな足跡を残されるとともに、学会の継続と発展に大きく貢献されました。

『総合政策』に最初に掲載された米地先生の論文は、「『日高見湾』(新称)と新国土軸構想—巨視的景観認識による国土環境の再検討例とその政策上の意義—」で、『総合政策』第1巻第1号(1999年3月31日発行)に掲載されました。そして、最後に掲載された論文は、「宮沢賢治が描いた架空の島『三稜島』の手書き地形図」で、亡くなる直前の2019年3月29日に発行された第20巻に掲載されました。このように20年余にわたって、本学会に論文を寄稿され、特にも宮沢賢治に関する多くの研究論文を残されたことは、本学会の大きな財産となりました。今後も米地先生のご遺志を受け継いで、本学会の発展にむけて努力していききたいと思います。

米地文夫名誉教授追悼文

総合政策学部教授 佐野嘉彦

本学が開学して1年ほど経った頃、岩手山で火山性微動が増加し、噴煙も少し確認されました。私たち総合政策学部では、この状況に対し、防災関連の研究チームを立ち上げました。その時に米地先生が「岩手山のような美しい形をしている火山は山体崩壊のような大規模な災害を起こすことがあるのです」というお話をされたことがありました。

私は、30年ほど前のことを思い出しました。

大学2年の先生の講義で、磐梯山は強大な1度の爆発で吹き飛んだのではなく、噴火後に起きた水蒸気爆発後の多段階になる山体崩壊でくずれたのだとする説でした。現在でも決着していない議論ですが、研究者の多くが重要な論文とされる、いわゆる関谷・菊池論文に論拠を求めるなか、少数派の一人である米地先生が、既存の論文の問題点の提示から始まり、爆発当時の写真、地元の人々の供述、地形のデータなど、さまざまなデータを示しながら議論を展開されるところに、真実に少しでも近づけていこうとする研究者の姿勢を強く感じました。

最近では、宮沢賢治に関わる研究を多くされてらっしゃいましたが、ともすれば偶像化される宮沢賢治ではなく、まず一人の人間としての、一人の学者としての宮沢賢治をとらえるところからはじまり、彼の作品の解釈に空想だけにはとどめない、地理学の立場から論理的な分析・考察をされる姿勢にも、研究者とは斯くありたいと思わせるものがありました。

これだけだとお堅い先生のようにも思われるかもしれませんが、お酒が好きで、ニコニコとしながら、本当に博覧強記と一言では言いつくせない幅広い知識を、とても楽しそうに語っていただきました。ジョーク付きで。

「ニルスの不思議な冒険」(セルマ＝ラーゲルレーブ作)は童話でありながら、本当に地誌学的ですよね、と私がいうと、ニコニコしながら「じゃ、宮沢賢治の『風野又三郎』(風の又三郎ではなく先駆系)は、わかりますか。ほぼ同じくらいに書かれた作品だけど、賢治はセルマの作品を読んだと思うんだよね。彼、花巻からわざわざ東京の丸善とかにもよくいったし。どう、一緒にこれらのことについて少し書いてみませんか、地理学者として」と言われ、一緒に研究をさせてもいただきました。思うに、少しでも興味のあることがあれば、それを拾い出し、そして研究対象として分析してみようと考えられる、幅広い知識と柔軟な考察力が先生の強みだったのだと思います。

追悼文

旅立たれるまで執筆活動をされておられたと聞き、学者としての人生に対して本当に尊敬いたしております。銀河鉄道に乗りながら、まだ執筆をつづけておられることをお祈り申し上げます。そういえば、松本零士の銀河鉄道と宮沢賢治の銀河鉄道では、発想が少し違うんだよね、という言葉も思い出されます。先生、ありがとうございました。

伊藤英之夫先生を偲んで

総合政策学会理事長 吉野英岐

岩手県立大学教授の伊藤英之(いとうひでゆき)先生が、2019年12月4日(推定)に53歳でご逝去されました。伊藤先生は1966年に北海道で生まれ、新潟大学理学部地質鉱物学科を卒業し、同大学院理学研究科地質鉱物学専攻に進学されました。新潟大学積雪地域災害センター雪泥流災害分野の研究生を経て、1993年に財団法人砂防・地すべり技術センターに技師として勤務されました。2003年に「十勝岳グラウンド火口形成以降火山活動史の解明と危機管理対応の研究」により、北海道大学より博士(理学)を取得されています。

その後、国土交通省国土技術総合研究所研究官を経て、2009年10月1日に総合政策学部准教授に着任し、2014年4月1日に教授に昇任されました。そして突然の逝去の直前まで、火山地質学や自然災害科学、防災学分野における研究、教育、社会貢献活動に精力的に取り組まれ、多大な功績を残されました。

伊藤先生は本学着任と同時に総合政策学会に入会し、2011年度に学会監事および機関誌『総合政策』の副編集委員長を歴任されています。伊藤英之先生のご冥福をお祈りするとともに、今後も本学会の発展にむけて努力していきたいと思っております。

伊藤英之教授追悼文

総合政策学部准教授 辻 盛生

伊藤英之教授が令和元年 12 月 4 日に急逝された。謹んでご冥福をお祈りする。私は平成 23 年に岩手県立大学に着任し、それ以来の付き合いである。すれ違いざまに冗談を言う、人の研究室に来てひとしきり愚痴を言って帰る、そんな憎めない人柄が偲ばれる。非常にアイデアにあふれ、学際的な分野に挑戦する姿勢は、ジオパークを訪れる旅行者の特徴や地域に求められる付加価値についてインターネットアンケートを用いて解析した研究業績などに現れている。湧水や温泉の水質変動を火山活動のインジケータとして活用する研究も、斬新な切り口を持つ伊藤教授ならではの。私はこの研究に共同研究者として同行させていただいたが、研究の着眼点や得られる成果の面白さに引き込まれた。本学着任前は、火山活動とそれに伴う火砕流や泥流のシミュレーションを得意とする技術者として活躍されていたが、その先には常に防災の意識があった。理学的な緻密な知見に、防災工学として人の命を守る厳しい視点を持ち合わせていた。この思いは、小中学生に対する熱心な防災教育に表れていると感じる。このような人を急に失ってしまったことを私自身容易に受け入れられないているが、岩手県、ひいては日本として失ったものは大きい。